

古里にあった創作の土台

25年前。加茂山彫刻展で入賞した時に、弘一は新潟日報に語っている。

「地球を彫ってみたい。何万年もの間、地球そのものであった石を彫りたい」

「テーマは『円』。自然のなりゆき

のままに生きていく営み、そうした自分の生き方をイメージしていきたい」

「農業は待ったなしの勝負。農業も地球を彫刻しているみたいに思う」

「何もなくて嫌だった」はずの笹神



- ① 荻野正弘・むつ子夫妻宅の庭にある作品「家族」。5個の石で構成＝胎内市
- ② 十日町駅西口の「空からの贈り物(電車ごっこ)」(1995年作)
- ③ 新潟市の信濃川左岸。萬代橋と柳都大橋の間にある「漁師とさかな」(1994年作)
- ④ 豪州シドニーの個人が購入した「らくだの国」(2004年作)
- ⑤ 米メイン州の石彫国際シンポジウムで創作した「らくだの国」(2012年作)



に、イタリアから戻った弘一は、そこに、自分が探していた創作の土台があることに気付いたのである。

弘一が使うのは花こう岩。雨や風、日の光を受けて石はやがて土になる。その土と水が命を育むーそんな循環が弘一の言う「円」なのだろう。

大自然の中で創作する彫刻シンポジウムやコンクールで、弘一の作品が評価されるのは、作家の足が地面に着いているからだと思う。大賞、優秀賞、入賞、入選は紹介しきれない。

「技巧に走るな」「迎合するな」。理恵子の率直な作品評は、弘一の創作の支えである。二人三脚で、この四半世紀に生み出された作品は広く国内外に展示されている。

その多くは屋外の公共空間だ。子どもたちがよじ登ったり、戯れたりするのは、作品が「温かい」ことの証しだろう。

庭の広い海外では、個人が購入するケースも目立つ。海外でコイチ・オギノの作品は人気だ。

国内にも「家に石彫作品を」という人はいる。

胎内市の荻野正弘(69)、むつ子(67)

宅の室内と庭には、家族のように「同居」しているものが何点もある。同姓は偶然で、血縁はない。作品展で魅入られたのがきっかけだ。

お気に入りには、大小5個の石を組み合わせた作品。タイトルは「家族」。両親と3人の子どもたちにも見える。それもそのはず、弘一が、夫妻の家族構成に合わせたのだという。

二人は「柔らかな感じがして和みます。朝と夕、光の当たり具合で違う表情になる。きょうはおしゃべりしているねえ。そんな風に見える」と、石との暮らしを語る。

究極の趣味は石にたどり着く、などと言うけれど、何だか分かる気がしてきた。

若手育成に力 熱い熟年

弘一は、立体、平面を問わず、若い芸術家の育成にも力を注ぐ。作品は未完成でも、独創的で意欲的な才能に出会うと、励ましたくなるのである。それは自身が、若き日に挑戦を続けた体験があるからだ。熱い熟年である。

発表の場が限られている若手のために、新潟市豊栄地区公民館を会場に、「美術企画展」を開いてきたのも、そんな思いの表れである。

23日までは「星奈緒展ーあいまいな人々ー」。魚沼市出身の新進画家のパステル画を「画面に触れて対話するよう」に塗り重ねて色を出す。清楚な、存在感のある作品」と評価する。

午前9時から午後9時まで。無料。育てるのはコメだけじゃなかった。

(文中敬称略)